

2017 年度福祉教育開発センターシンポジウム 「社会的排除の問題からソーシャルワーク教育を考える ——ハンセン病回復者と家族の体験から学ぶ専門職の使命」

泉 洋 一
松 本 聡 子

1. はじめに

本稿は、福祉教育開発センターシンポジウムの関連事業として 2016 年から 2017 年にかけて実施した「社会的排除の問題からソーシャルワーク教育を考える」の実践報告である。その内容は、我が国のハンセン病問題¹⁾の歴史的経緯を学び、ハンセン病回復者や家族の体験談を通じて社会福祉専門職としての使命や役割を考えることを意図したソーシャルワーク教育である。

2. 福祉教育開発センターシンポジウムとの連動企画

例年 12 月に開催している福祉教育開発センターシンポジウム²⁾（以下、センターシンポジウム）であるが、2016 年は 7 月初旬からワーキング会議（福祉教育開発センター・社会福祉学部の教員および福祉実習課職員で構成）で協議を始めた。

前年のセンターシンポジウム「平和と福祉」の成果を踏まえつつ、2015 年 9 月の厚生労働省「新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」（新福祉ビジョン）が地域共生社会や地域包括ケアの名の下に社会保障費の抑制を意図している問題を取り上げ、2016 年テーマを「私たちが考える“新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン”」とするに至った。

しかし、センターシンポジウムを単発で終わらせるのではなく、その前後にソーシャルワーク教育を意図した学習会を実施することで“新たな福祉専門教育の開発”につなげる試みとして 2016 年 10 月から始めたものである。

なお、2016 年 12 月 4 日のセンターシンポジウムでは、鈴木静氏（愛媛大学）より「社会的排除と福祉の観点から－ハンセン病問題患者にとっての戦争と人権保障」をテーマに問題提起がなされた。また、会場入口で国立ハンセン病資料館から借用した啓発 DVD「ハンセン病を知っていますか」と「平沢保治さん講演・教員編－命と心と平和の教育を」を上映した。

2017 年 12 月 10 日のセンターシンポジウム「災害ソーシャルワークから社会的排除を考える～福祉専門教育のネクスト」では、冒頭の特別報告「社会的排除とソーシャルワーク実践－ハンセン病対策の教訓から」において、泉より本稿の概要を報告した。また、会場には長島

愛生園入所者自治会から借用した自治会制作パネル 45 枚と岡山県健康対策課制作パネル 8 枚をハンセン病の正しい知識とハンセン病対策の歴史を参加者に伝えるために展示した。

このようにセンターシンポジウムと連動した関係性を維持しながら新しい福祉専門教育の開発に向けたソーシャルワーク教育を試行したのである。

3. 筆者らの問題意識と動機

なお、この取り組みを始めるに当たっての筆者の問題意識及び動機には、下記に掲げたような社会的背景があり、社会福祉専門職を目指す若者が人の尊厳や命の尊さについて主体的に考える教育内容を目指すことになった。

- ①近年、国際的にも格差の拡大や社会の分断、民族主義の台頭、世論の右傾化等が取り沙汰され、移民や難民、LGBT などのマイノリティに対する社会的排除や差別、ヘイトクライム（憎悪犯罪）等が増加傾向にあることが指摘されている。
- ②格差社会が進む中で、新たな貧困問題の発生と社会的孤立、社会的排除の問題が指摘される中、生活保護受給者やホームレス、障害者などへの社会的バッシングが拡大する一方、社会保障や社会福祉が制度的機能不全とも言える状況下にある、社会的排除や社会の分断・孤立に対する国家レベルでの政策や対応が喫緊の課題とされている。
- ③2016 年 7 月 26 日に神奈川県相模原市の障害者施設において、元職員による入所者への殺傷事件が発生した。重度の障害者に対するヘイトクライムとも言える事件である。また、本事件を契機として、極めて少数ではあるが、障害のある人の社会的メッセージに対する誹謗・中傷や容疑者への同調がインターネット上のブログや SNS 等で散見されるようになった。
- ④若者の生きづらさが指摘される中、奨学金返済や長期化するひきこもりの問題、とりわけ若者の死因の第一位が自殺であるなど、若者に対する社会福祉制度の欠落を前提とした社会問題がクローズアップされている。

このような中、社会福祉士や精神保健福祉士などの社会福祉専門職を養成する大学として、福祉専門教育の中で人の尊厳や普遍的平等、人権を根底から考える授業を展開する必要に迫られたことが本教育実践の出発点でもある。

社会福祉専門職を目指す学生が主体的に人の尊厳と価値について考え、命の尊さを学び、社会的排除を乗り越える価値観の獲得に寄与できる教育内容を考慮する中、ハンセン病回復者と家族の体験から学ぶことが多くあると考えるに至った。

4. 2016 年「ハンセン病回復者の歴史と現状を知る」取り組みの概要

2016 年はセンターシンポジウム（12 月 4 日）の事前と事後の学習会という位置づけでスタート。我が国のハンセン病強制隔離の歴史と現状から社会的排除の問題を掘り下げ、社会福祉専門職の使命と役割について考える教育プログラム「ハンセン病回復者の歴史と現状を知る」

とした。対象は精神保健福祉士の資格取得を目指す「精神保健福祉援助演習2A」を履修中の3回生（30名）を中心に、広く社会福祉学部生および教職員に呼びかけた。

事前学習会は10月26日と11月2日の2回実施し、記録映画『生きとった証し^{あか}』の上映に松本による講義を加えた。また、事後学習会は12月12日にハンセン病回復者と家族をゲストスピーカーとして招聘し、二人の体験談を中心に座談会形式で参加者との体験交流を図った。

1) 事前学習会「ハンセン病問題から学び考える学ぶ」（2回）

「ハンセン病問題から学び考える ～記録映画から社会的排除の経緯と現状を学ぶ」

日 時：（第1回）2016年10月26日 （第2回）2016年11月2日 各90分

内 容：記録映画『生きとった証し^{あか}』（2002年）RSK 山陽放送 上映

日本民間放送連盟賞・テレビ報道・優秀賞受賞作品

講 義：「ハンセン病問題から考える」松本 聡子（非常勤講師）

（概要）

事前学習会は、2002年山陽放送の報道番組『生きとった証し^{あか}』を二度に分けて鑑賞し、同時に松本の講義「ハンセン病問題から考える」を通じて、ハンセン病の基本知識と我が国固有のハンセン病の強制隔離の歴史的経緯について解説を加えた。

まず記録映画『生きとった証し^{あか}』は、強制隔離政策により人生を奪われたハンセン病回復者の苦難の歴史を当事者の語りから描いたドキュメンタリーである。また、同作品は2002年の日本民間放送連盟賞・テレビ報道・優秀賞を受賞しており、「ハンセン病問題をあらゆる角度から浮き彫りにした取材力、構成力が評価」³⁾された優れた映像作品である。

とりわけ『生きとった証し^{あか}』には、多くのハンセン病回復者が登場し、自らの強制隔離の半生を物語る。その内容は、ハンセン病に対するいわれなき差別や迫害の体験とともに、家族との絆を引き裂かれ、本名すら名乗れずに生きる苦悩が描かれている。そして、追い打ちをかけるように残された家族への差別や社会的排除の実態は、ハンセン病であった人の家族が多大な犠牲を強いられてきた事実をクローズアップさせた。ハンセン病回復者とその家族が背負わされてきた重荷と重圧が心の叫びとして伝わってくる映像であった。

また、松本の講義「ハンセン病問題から考える」では、資料⁴⁾や新聞記事⁵⁾をもとに我が国の隔離政策の歴史と現状を解説し、ハンセン病回復者との出会いとライフワークであるハンセン病回復者への支援の取り組みを自らの体験として伝える内容となった。

2) 事後学習会「ハンセン病回復者と家族の体験から学ぶ」(座談会)

「ハンセン病回復者と家族の体験から学ぶ～社会福祉専門職はなにができるのか」

日 時：2016 年 12 月 12 日 16:10～19:00 (2 時間 50 分)

内 容：ハンセン病回復者と家族の体験談、座談会での意見交流

講 師：ハンセン病回復者 森 敏治さん、家族訴訟原告団副団長 ^{ファン グァンナム} 黄 光男さん

コーディネーター：松本 聡子

(1) 事後学習会の概要

事後学習会はセンターシンポジウム開催後に実施することになり、ハンセン病回復者と家族の体験から隔離収容政策の過ちを学び、社会の偏見や差別に直面してきた当事者や家族の思いを受けとめる機会となった。また、学生が主体的に参加できることを意図して、学生ボランティアによる実行委員会での企画と運営、記録、礼状、反省会までを担う方法を取り入れた。その結果、70 名を超える学生の参加を得ることができた。

事後学習会では、最初にハンセン病回復者の森さんが国立療養所長島愛生園への入所の経緯や療養所での生活、岡山県立邑久高等学校新良田教室で出会った仲間と過ごした日々についても語られた。「必ず社会復帰する」という強い意志のもと 20 代半ばで療養所を退所し、履歴書を書けない苦悩を抱えながらも就労に漕ぎ着け、何とか地域での暮らしに根を下ろしていく中、らい予防法違憲国賠訴訟の闘いを通して「(病気を) 隠さないで生きる」ことを決意、その後各地で講演活動や当事者運動を積み重ね、周囲から受けた差別や社会的排除の実態だけでなく、一人の人間として生きる意味をその体験から話された。

続いて^{ファン}黄さんからは、一歳のときにハンセン病であった母親が長島愛生園への入所を余儀なくされ、子どもの発達段階においてとても大事な時期でもある九歳までを、家族と引き裂かれて施設で暮らさざるを得なかったなかで、その後の母子関係においても複雑な胸のつかえを抱えたまま大人になったことや、その根底にあった当時の無癩県運動がいかに苛烈になされたかについても詳しく説明がなされていた。現在は、ハンセン病家族訴訟の原告として、家族の受けた被害への謝罪と賠償を求めて闘っていることも伝えられた。そして最後に自作の歌「閉じ込められた^{いのち}生命」をギターで弾き語りで熱唱された。

二人の体験談からは、国家によるハンセン病に対する隔離収容政策のもと、人としての尊厳や自由、家族、生活の場を奪われ、社会的に排除された過程において、日本国憲法に規定された法の下での平等や基本的人権の保障すらなされなかった歴史的事実を学ぶ機会となった。

(2) 事後学習会に対する学生の感想

事後学習会終了後、学生から提出されたコメント・シートには、率直な感想がびっしりと書

き留められていた。ハンセン病であった当事者や家族が国家による強制隔離政策のもと、社会的に排除され、人としての権利を奪われ、社会的孤立の状態へ追い込まれていった苦悩をどのように受けとめればよいのか、学生一人ひとりが真剣に考え、模索した様子が綴られた言葉と文脈に残されていた。ここでは二人の学生のコメントを紹介する。

(学生 A)「森さんのお話をきいていると、生活の中に自由があるという今の私たちの環境はどれほど尊いことか、また、その私たちは間違った知識や情報をうのみにしたり、抗わないことで、誰かのそうした環境を一瞬にして奪い、人生を左右してしまう恐ろしいものも持ち合わせていることを学ぶことができた」

(学生 B)「黄さんがこれまでたどってきた歴史を、包み隠さず、すべてお話しいただき、ありがとうございます。ハンセン病の問題は、回復者の方だけでなく、そのご家族の方をも苦しめたということがわかりました。黄さんのお話を聞かせてもらって、力の持った者の言うことを鵜呑みにせず、『おかしいことはおかしい』と言える勇気が私にはまだ足りないということや、はやしから林 力さんの『恥でないものを恥とすると、これを恥という』という言葉は、私にこれまでの人生を振り返って考えるきっかけをくれました」

5. 2017 年「社会的排除を乗り越えるソーシャルワーク実践」取り組みの概要

2017 年は、国立療養所長島愛生園への訪問と入園者との交流を図ることを目標に、前年とは異なる正課外でのフィールドワークと学習会という方法を採用。教育テーマを「社会的排除を乗り越えるソーシャルワーク実践－ハンセン病・体験交流プログラム」とした。

なお、長島愛生園訪問（10 月 7 日）にあたり、社会福祉学部生へ任意参加として呼びかけ、参加を表明した学生を対象に事前学習会と事後学習会を開催し、学生自身の主体性と問題意識を育みながら実施することにした。

1) ハンセン病・体験交流プログラムの趣旨と参加者募集

長島愛生園訪問に参加する学生を募集するため、下記のとおり配布チラシに趣旨と教育目標を掲載し、社会福祉学部生に広く呼びかけを行った。

（趣旨）我が国は、明治から昭和にかけてハンセン病の人を強制隔離し、療養所での生活を強いてきた。隔離政策は、昭和 20 年代に治療法が確立されハンセン病が治る病気になってからも続けられ、1996 年「らい予防法」廃止まで続いた経緯がある。現在でも国立ハンセン病療養所 13 カ所に約 1,500 名が入所されており、平均年齢は 85 歳を超えている。本来ならば療養所を離れ、希む地域へ帰るところ、社会の無理解や偏見が残っている中での社会復帰は思うように進まず、療養所での生活を余儀なくされている現状がある。

このような中、国立療養所長島愛生園を訪問し、ハンセン病に関わる我が国固有の強制隔離の歴史と現状を学び、ハンセン病回復者の体験談を傾聴する過程をもとに社会的排除の問題に向き合い、ソーシャルワークの諸原理である社会正義や人権、集団的責任、多様性の尊重について考え、いのちと暮らしを守るソーシャルワーク専門職の使命と役割を学ぶ機会とする。

(目標) ①ハンセン病の理解及び国策として進められてきた歴史的経過の理解、②当事者の体験を受けとめ、その思いを受け継ぐ過程での対象理解、③本件の社会的課題と解決に向けた取り組みの実際の理解、④社会的排除が生まれる構造の理解、⑤これからのソーシャルワーク専門職の果たすべき使命と役割考察

その結果、13名の学生(2年生2名、3年生1名、4年生10名)がエントリー、教員は松本、泉に後藤至功が加わり3人体制になった。

2) 事前学習会「もうひとつの橋」(2回)

日 時：(第1回) 2017年9月28日 (第2回) 2017年10月6日 各90分

内 容：ドキュメンタリー『もうひとつの橋』(1983年) RSK 山陽放送 上映と解説
第4回「地方の時代」映像祭グランプリ受賞作品(47分)

担当者：松本 聡子、泉 洋一

(概要)

事前学習会では、長島愛生園の見学に当たり1983年 RSK 山陽放送制作のドキュメンタリー『もうひとつの橋』を鑑賞。本作品は「人間回復の橋」と言われた邑久長島大橋(1988年)が設置される前の長島愛生園の入所者の暮らしを取材しており、ハンセン病回復者の生活と苦悩を受けとめる機会となり、架橋に向けた運動の経緯を知ることができた。

数多くの入所者が強制隔離された辛い体験を語っているが、とりわけ1983年当時、園内にあった岡山県立邑久高等学校新良田教室に通う高校生(入園者)の心の葛藤が描かれており、学生にとって同世代の若者が苦悩する姿に我が身を投影して考えることができたのではなかろうか。

また、長島とは数十メートルの瀬溝を隔てた町に住む住民の心ない差別発言の場面もあって、ハンセン病とその回復者らに対する根強い偏見が身近な地域社会に残る実態を捉えており、私たち一人ひとりが身近な地域でこの問題への偏見や差別に向き合うことが重要であることを認識するに至った。

なお、前年の学習会資料に加え、石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞を授賞した山陽新聞社の『語り継ぐハンセン病—瀬戸内3園から』(2017年)を抜粋⁶⁾して配布し、学生の自己学習に結びつく教材として位置づけた。

3) 国立療養所長島愛生園の見学と入園者との交流（1回）

日 時：2017年10月7日（土）7:00～19:00
場 所：国立療養所 長島愛生園（岡山県瀬戸内市）
内 容：長島愛生園歴史館及び園内見学、入所者体験談
参加者：社会福祉学部生13名（2回生2名、3回生1名、4回生10名）
教員3名（松本 聡子、後藤 至功、泉 洋一）

（概要）

長島愛生園歴史館では、庶務課・森さんによる丁寧な解説をもとに長島愛生園の歴史的経緯を学習。その後、園内を徒歩で移動しながら収容棧橋、収容所（回春寮）、監房、目白寮跡などを見学し、納骨堂をお参りした。また、入所者自治会長の中尾伸治さんは、入所に至る経緯や入所時の様子、家族との関係など、長島愛生園での69年にわたる入所体験を詳細に語られた。

長島愛生園の入園者の高齢化が加速する中で、次々に入所者が亡くなられる現状とハンセン病問題を次世代へ継承する困難に直面していることが吐露され、世界遺産登録に向けた運動についても紹介された。

中尾さんの体験談を伺う中で、社会福祉専門職がどのような認識と立ち位置でハンセン病問題に向き合うべきなのかを考えさせられる時間となった。

4) 事後学習会（3回）

日 時：（第1回）2017年10月23日 90分 （第2回）2017年11月16日 130分
（第3回）2017年11月17日 90分
内 容：国立療養所長島愛生園見学及び入園者による体験談の振り返り
担当者：松本 聡子、後藤 至功、泉 洋一

（概要）

事後学習会では、長島愛生園見学と中尾氏の体験談を振り返り、改めてハンセン病であった人や家族が国家政策によって生きる権利を奪われ、社会の無理解や偏見、差別に直面してきた事実とそれに荷担した専門職の責任を考える機会となった。

この世の理不尽のすべてと言っても過言ではないほどの過酷な生活を課せられたハンセン病であった人や家族の体験を、社会に伝えていく努力を私たち自身が惜しんではならないことを皆が確認する時間となった。

5) 長島愛生園訪問と入園者の体験談に対する学生の感想

事後学習会終了後、学生から提出されたりポートには、長島愛生園での体験を通じてハンセン病問題への継続的な関心と関与を意識する内容が多く、一人の人間として、或いはソーシャルワーク専門職を目指す若者として、自分ができることは何かを考え、一つひとつの言葉を丁寧に紡ぎ出す姿を読み取ることができる。ここでは三人の学生のコメントを紹介したい。

(学生 C)「長島愛生園を始めとする 13 の療養所において、多くの方々の長く尊い時間・自由が偏見や差別から奪われたといった出来事は、本当に悲しいことであり、今後絶対に繰り返してはならない事実です。『正しく知って、正しく行動する』といった言葉にもありました通り、自分自身が赴き、目で見ても耳で聞かないと『わからない』『知らない』で終わってしまうことが世の中にはあるのだという事実を改めて感じました」

(学生 D)「少しでも隠されている事実気づけるよう、また、流されずに自分の心と頭で判断できるように、少しずつでも『正しく知る』努力をしていき、政府がしてきたことやこれに対する私たち世代がすべきことをまずは考えていくことで、『偏見』や『差別』といった言葉の無い世界を始めていきたい」

(学生 E)「今回、長島愛生園で改めて感じた『人として生きる権利』が容易に奪われかねないという危機感、それが将来に長く爪痕を残す危険性に対して、福祉を学ぶものとして目をそむけずに向き合っていかなければならないと思いました。今回の経験を大切にし、体験談での話しにあったように今後に向けてハンセン病の歴史を受け継ぐ一端を担えたらと思います」

6. ソーシャルワーク教育の課題と可能性

筆者は社会福祉教育に携わるソーシャルワーク専門職として、学生たちの意識の変化や成長を感じる中で改めて考えさせられることが多々あった。とりわけ学生たちが受けてきた義務教育の中でハンセン病問題を取り上げる授業が一部の教職員や学校では取り組まれているものの、ほぼ皆無に等しいという実態に、改めて教育の中にハンセン病問題を明確に位置づける必要性を感じた次第である。

また、日本の社会福祉教育の中で、ハンセン病問題はいかなる位置を占めてきたのかについても考察を深める必要があるだろう。それは、ハンセン病回復者の社会的復権が未だに進まない現状に対して、福祉教育そのものの存在価値が問われているのではないかと思えるほど重要な問題である。

加えて我が国のハンセン病対策の過ちから学ぶべき教訓は、社会福祉専門職（ソーシャル専門職）が国家に対して、どのような視座を獲得すべきかという点で考える力を与えるという認

識である。山根の『国や権威を信じやすい』という、日本人の抱える普遍的な問題すら示唆されている⁷⁾との指摘にもあるように、福祉政策や制度を過信するのではなく、社会福祉専門職はクライアントの声なき声に耳を傾け、社会的排除や孤立の状況に置かれている実態を変えていくための使命と責務を担っている。

らい予防法がハンセン病であった人や家族を長年にわたり苦しめたように、時には立法の無作為を社会に訴え、社会変革につなげていく力を育む教育が求められているといえよう。ソーシャルワーク専門職のグローバル定義にも定められた「社会正義や人権、集団的責任、多様性尊重の諸原理」に基づいたソーシャルワーク実践に息吹を与える教育実践が必要なのである。

この点からもこれからの福祉専門教育（ソーシャルワーク教育）を考え、ハンセン病問題を積極的に取り入れていきたいと考えている。それは、ただ単に教育テーマや教育プログラムとしてハンセン病問題を取り上げるということではなく、在学中のソーシャルワーク教育と卒業後のソーシャルワーク実践とをつなぐ価値基盤を強化する過程としての位置づけである。

思うに社会福祉専門職（ソーシャルワーク専門職）は、ハンセン病問題に対して、どのような立場で、どのように関わりを続けてきたのであろうか。そして、職能団体（専門職集団）はどのように関与してきたのか。

加えて、私たちの目前に置かれた問題として、ハンセン病回復者や家族の人たちの尊厳や権利の回復に、どのようなソーシャルワーク実践を展開すべきなのだろうか。この点についても職能団体との連携のもとに卒業後の現任教育として位置づけていくことが可能であろう。

格差社会が拡大し、世論が右傾化するとともに社会が分断されつつあることは、生活保護受給者の急増やそれに対するバッシングからも明らかである。このような社会現象に対して、西村は大阪府警の機動隊員による土人発言や相模原事件、在日コリアンや被差別部落、LGBTなどへのインターネット上の差別的な書き込みなどを取り上げ、「権力に向かうべき民衆の不満が、弱者に向けられた」⁸⁾と指摘する。

このような社会的弱者に向けられた不満に呼応するかのように生活保護基準の引き下げ政策が横行する。国家による人の尊厳の剥奪や権利侵害が現実には起きている社会状況の中で、社会正義や人権、集団的責任、多様性尊重の諸原理に基づいたソーシャルワーク専門職は、どのような方法と実践でこれらの政策に対抗し、社会変革や社会的結束、人々のエンパワメントと解放を促進し得るのか。ハンセン病問題の歴史的経緯を学び、ハンセン病回復者と家族の体験から社会福祉専門職の使命と役割を考える意義は大きいと思う。

注

- 1) 本稿でのハンセン病問題は、「ハンセン病問題の解決に関する法律」（平成20年法律第82号）第一条の定義に基づき使用している。
- 2) 福祉教育開発センターシンポジウムの目的・役割・成果は、泉により次のように総括されている。

「①身近な福祉課題を一般市民や当事者、福祉従事者とともに考える機会であること、②産学協同の研究・教育実践の場として、社会問題や福祉課題の認識を高め、参加者と共に学び考える過程を通じて、具体的な対応や提言を発信してきたこと、③福祉教育開発センターの使命である理論と実践をつなぎ、学生教育サービスに還元するという機能と役割を地域社会や福祉現場との協同から発展・充実させる場を提供してきた」

泉洋一（2013）「福祉教育開発センターシンポジウムの成果と今後の課題について」『福祉教育開発センター紀要』No.10.1.

- 3) 日本民間放送連盟賞 2002 年（平成 14 年）入選・事績（<https://www.j-ba.or.jp/category/awards/jba100929>）
- 4) 事前学習会の資料として、次に掲げるハンセン病の啓発パンフレットを配布。
 - ①「ハンセン病問題のこと正しく知っていますか？」第 7 版，岡山県，2015 年 6 月 30 日。
 - ②「知ってほしい，ハンセン病のことー希望ある明日へ向けて」日本科学技術振興財団，2015 年 12 月 1 日。
 - ③「ハンセン病の向こう側」厚生労働省，2016 年 1 月。
 - ④「長島愛生園 歴史回廊」長島愛生園歴史館。
- 5) ハンセン病の歴史と現状を伝える配布資料として、次に掲げる新聞記事を使用した。
 - ①「ハンセン病訴訟勝訴 人間の尊厳認められた」『讀賣新聞』2001 年 5 月 11 日。
 - ②「ハンセン病 判決から 3 年，300 人が社会復帰『出合い』町に在るから」『朝日新聞』2004 年 5 月 10 日。
 - ③「ハンセン病療養所 岡山「長島愛生園」「邑久光明園」：隔絶の島，苦境の歴史 世界遺産登録目指す」『毎日新聞』2013 年 11 月 5 日。
 - ④「ハンセン病 予防法廃止 20 年 元患者 戻らぬ尊厳」『毎日新聞』2016 年 3 月 27 日。
 - ⑤「ハンセン病問題の今 家族引き裂いた法律 母の病歴，妻に言えず」『毎日新聞』2016 年 5 月 9 日。
 - ⑥「憲法を考える：あの隔離から 平沢保治，内田博文，樹木希林」『朝日新聞』2016 年 6 月 10 日。
- 6) 山陽新聞社編（2017）『語り継ぐハンセン病ー瀬戸内 3 園から』山陽新聞社，22-8, 138-60, 229-51.
- 7) 山根基世は，石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞の審査委員として『語り継ぐハンセン病ー瀬戸内 3 園から』の受賞理由を「らい予防法の廃止から 20 年になる。私自身取材した経験もあり，ある程度知っているつもりになっていた。マスコミでも語り尽くされているように感じ，今さら何故？という思いで読み始めたが，この連載によって，問題は今なお終わっていないことに気づかされた。（中略）さらに私たち自身の偏見や差別意識が，大勢の患者たちに理不尽な人生を強いてきたことへの憤りが「声低く」語られ，読者の共感を呼ぶはずだ。そこには『国や権威を信じやすい』という，日本人の抱える普遍的な問題すら示唆されているのではないだろうか」と述べている。（<https://www.waseda.jp/top/news/45979>）。
- 8) 「西村秀樹：権力でなく弱者向く不満」「（耕論）社会の底が抜けたー出口真紀子，西村秀樹，鴻上尚

史」『朝日新聞』2016年12月8日.

（いずみ よういち 福祉教育開発センター）
（まつもと ときこ 非常勤講師）